

団塊世代が児童期に受けた家庭教育論レビュー

—雑誌『家庭教育』を事例として—

田中 亨胤

雑誌「家庭教育」を基礎資料として、「団塊世代」の児童期には、どのような家庭教育を受けてきたのか、この点を可視化することに、本稿としての研究の目的がある。各「通巻号」における「特集」を基本に、キーワードを析出し、家庭教育論の基本的な六つの視座を把握した。「基礎学力の充実」「学習の系統性」「生活規律と道德教育」「学校教育への理解」「子どもの成長過程への関心・理解とかかわり」「家庭教育の充実と親の情熱」である。

キーワード：団塊世代、家庭教育論、学力の競争と向上、教科学習の徹底、科学性教育の推進

1. はじめに

「団塊世代」は、わが国の社会史的には定着した用語となっている。「団塊世代」は、造語である。作家であり、旧通商産業省鉱山石炭局官僚であった堺屋太一が、1970年代前半に命名した。堺屋は、『団塊の世代』（1976年）を発表し、その書名である「団塊世代」が人口に膾炙し、流行語となった。

団塊の世代は、おおむね1947（昭和22）年から1949（昭和24）年に生まれた世代である。人口の構成からすると、他の世代に比較して、きわめて多く（約806万人）、突出する状況にあり、人口ピラミッドでは、歪さをもたらしている。2016（平成28）年現在、70歳前の67歳から69歳の人たちである。

本稿では、「団塊世代」の人たちが、児童期にどのような教育を受けてきたのか、この課題に、研究としての関心を寄せるものである。この点の素描については、「資料報告」（2015）として、公表している。¹⁾

2. 研究の目的

(1) 問題の所在

本研究は、資料の基礎的整理を基に、「団塊世代」を素描するものである。「団塊世代」は、良くも悪くもさまざまな捉え方が巷ではある。印象的な感じ取りもあれば、的確なる把握の世代像もある。そのいくつかを、紹介しておこう。

「団塊世代」は、青年期に至るまでには、次のような辛辣な言われ方をしてきた。

「戦争を知らない子ども世代」「すし詰め学級」（一学級50～60人）「教室不足」「競争の舞台としての学校」（試験成績の貼り出し）「低い大学進学率」（15～20%）「大学紛争の主役」（第二安保闘争・大学封鎖）「ジーンズやミニスカート」「ロングヘア」「グループサウンズ」「進歩的でありながら保守的」「他人の意見を容易には受け入れようとしない」「自分へのこだわり」「大量消費生活への参画」など、ざっとはこのような、ものであろうか。

「団塊世代」は、今や70歳になんなんとする60歳代後半の「老齢基礎年金」受給者である。そうでありながら、「2012年問題」を経て、諸種

の年金の受給は低く抑えられ、「生涯現役」の流れに漬け込まれている。「団塊世代」は生涯にわたって、その特異なる宿命を背負って、それぞれの人生をしぶとく歩んでいると思いたい。本論文の執筆者である田中は、1947（昭和 22）年生まれの「団塊世代」児であり、諸種の学校教育を受け、就職し、家庭を持ち、子育てをし、年金受給者であり、今なお生涯現役を細々とつないでいる立場にあるからである。

(2) 研究の目的

このような「団塊世代」ならではの、自らが意図しない「疾風怒濤」の中で、児童期にどのような雰囲気学校教育や家庭教育を受けてきたのか。この点について、自分史的なドキュメントも多少は組み込みながら、教育背景として潜在していたと思われる教育研究仮説の解き明かしを試みるとともに、どのような学力観によって学校教育をはじめ、学校教育を補完する家庭教育が進められてきたのかを明らかにすることを、本研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 基礎資料名

○雑誌「家庭教育」（西日本図書株式会社）（昭和 31 年 4 月創刊号より、63 号まで／欠号あり）

(2) 基礎資料の収集時期

○昭和 52 年 8 月（雑誌受け取り・聞き取り）

(3) 基礎資料の寄贈者

○山口頼人（物故者）：昭和 23 年生まれ団塊世代児童の保護者である山口頼人より、生前に寄贈。

(4) 資料分析要領

- 各号に記載された内容の読み取り
- 読み取りに基づく教育理論仮説の可視化
- 教育理論仮説の記述内容における検証

4. 研究結果の概要

(1) 雑誌「家庭教育」のプロフィール

雑誌「家庭教育」は、西日本図書株式会社（広島市）から、出版されていた家庭教育啓発雑誌である。雑誌の編集および記述内容からは、小学生・中学生の保護者を対象としていると考えられる。創刊号は、昭和 31 年 4 月である。現在は、廃刊となっている。どの時点で廃刊になったのかについては、検索不能の状態にあり、不明である。

雑誌「家庭教育」への編集参画・協力者は、広島大学教育学部の教育研究者をはじめ、学校教育および社会教育の実践に深く関与している実務者などである。雑誌編集、執筆内容は、学術的基盤（教育学・心理学・教科教育等）を下地にして、具体的な実践の考え方や事例の内容から組み立てられている。ここに雑誌「家庭教育」の特色がある。

販売部数の実績は、不明であるものの、昭和 30 年代において、西日本の地域の小学校児童・中学校生徒の保護者に愛読されていたと推測される。保護者からの投稿も編集内容の重要な不動の柱になっている。結果的には、「団塊世代」の児童・生徒を対象とし、昭和 30 年代、40 年代前半の社会的機運を背景にして、雑誌「家庭教育」は、編集・執筆されている。

(2) 購読者・寄贈者から寄せられた雑誌への評価プロフィール

寄贈者山口頼人からは、寄贈者自身の家庭教育における雑誌「家庭教育」に対する高い好評価が寄せられている。インタビューからは、次のような点が強調点されている。

- 「実に具体的に役に立った」
- 「夫婦で雑誌を読みこなし、我が子の家庭教育の環境を配慮した」

- 「我が子に伝えながら、親としても勉強になった」
- 「我が子が学校でどのような考え方で、どのような内容で教育を受けているのかについて理解が進んだ」
- 「授業参観や担任との面談には関心を持って参加・出席した」
- 「親戚の親や知人にも雑誌の購読を勧めたし、貸し出しもした」
- 「学校の担任から、家庭ではどのような教育や生活を心がけているのか、教えてほしいと、保護者懇談会で言われた」
- 「どうしたら優秀な学力を身につけていけるのかを、教員に教えてほしいと言われた」

(3) 寄贈者山口頼人家における家庭教育の成果

雑誌「家庭教育」に対する山口頼人の高い評価は、団塊世代の長女および長男、親戚関係の団塊世代の児童のその後の大学進学に反映されていることにも裏づけられる。団塊世代児童および山口一族の児童の進学大学は、例えば、男児は、東京大学、九州大学、東北大学、京都大学、早稲田大学ほか、女兒は、奈良女子大学、慶応大学ほかとなっている。家庭教育の結果の一つとして、大学進学が、団塊世代児童の保護者には見える到達点であったと考えられる。

(4) 雑誌「家庭教育」の特集タイトル概要

「家庭教育」のトピックスとして、各号に「特集」が組まれている。雑誌「家庭教育」の発行年代からすると、「特集」は、その当時に団塊世代児童の小学生・中学生であった保護者に向けた「家庭教育」に期待する具体的なメッセージである。

①「特集タイトル」の変遷

- 通巻 12 号（昭和 32 年 3 月）：「よい叱り方・よ

いほめ方」（叱ってよかったこと、わるかったこと／ほめてよかったこと、わるかったこと）（コード C・F）

- 通巻 13 号（昭和 32 年 4 月）：「子どもが本をよく読むようになるには」（コード A・F）「新入学児童・生徒の親の心得帳」（コード D・F）

- 通巻 14 号（昭和 32 年 5 月）：「よい友だち・わるい友だち」（コード C・E）「わが子の勉強仲間と遊び仲間」（コード A・E・F）

- 通巻 15 号（昭和 32 年 6 月）：「親孝行と愛国心—親の考え・子どもの意見」（コード C・F）

- 通巻 16 号（昭和 32 年 7 月）：「家庭での学科の指導」（コード A・B・F）「家庭教育のポイント」（コード A・F）

- 通巻 17 号（昭和 32 年 8 月）：「夏休みのオール心得集」（コード F）「1 年生のチィチィパッパ座談会」（コード F）

- 通巻 18 号（昭和 32 年 9 月）：「科学性の芽をのばすには」（コード A・B）「子どもの座談会—将来は何になりたい？」（コード E・F）

- 通巻 19 号（昭和 32 年 10 月）：「本と子ども」（コード F）「通知表診断室」（コード D）

- 通巻 20 号（昭和 32 年 11 月）：「子どもの基礎学力」（コード A・B）

- 通巻 21 号（昭和 32 年 12 月）：「PTA 活動の ABC」（コード D）

- 通巻 22 号（昭和 33 年 1 月）：「これからの道徳教育」（コード C）

- 通巻 23 号（昭和 33 年 2 月）：「子どもの道徳・おとなの道徳」（コード C）

- 通巻 24 号（昭和 33 年 3 月）：「家庭でしつける作法 20 か条」（コード C・F）

- 通巻 25 号（昭和 33 年 4 月）：「子どもの“遊び”」（コード E）

- 通巻 26 号（昭和 33 年 5 月）：「“よい子”にしたいならば・・・—作文の中に子どもの道徳意

識をさぐる―」(コードC)

○通巻27号(昭和33年6月):「(性発達の心理)男の子と女の子」(コードE)「(学科の手引き)家庭では作文をどう導くか」(コードF)

○通巻28号(昭和33年7月):「先生の通知表」(コードD)「宿題のすべて」(コードD・F)

○通巻29号(昭和33年8月):「親の夏休み対策」(コードF)

○通巻30号(昭和33年9月):「家庭の環境と子どもの性格」(創刊30号記念特集)(コードE・F)

○通巻31号(昭和33年10月):「子どものモラルはどう変わったか」(コードC)「宿題の効果的なやらせ方」(コードF)

○通巻32号(昭和33年11月):「これからの学校教育はどう変わる」(コードD)

○通巻33号(昭和33年12月):「“道徳時間”を参観する」(コードC)

○通巻34号(昭和34年1月):「わが子の教育はうまくいっているか―勤評・道徳教育・学力・進学の問題等と親の願い―」(コードA・C・F)

○通巻35号(昭和34年2月):「子どもの将来と進学の問題」(コードA・F)

○通巻36号～52号(未収集による欠号)

○通巻53号(昭和35年8月):「教科書―これをどう考えたらよいか―」(コードD)

○通巻54号(昭和35年9月):「セックス・ゼロ・アワー(小・中学生の性報告書)」(コードC・E)

○通巻55号(昭和35年10月):「家庭教育論」(コードF)

○通巻56号(昭和35年11月):「〇×式テストから論文体テストへ」(コードA・D)

○通巻57号(昭和35年12月):「テストと勉強」(コードA・B)

○通巻58号(昭和36年1月):「子どもを見る親の目・社会の目」(コードE・F)「勉強のジャ

マをするな」(コードA)「あなたを親としてテストする」(コードF)「現代・しつけ秘伝」(コードF)

○通巻59号(昭和36年2月):「競争の教育」(コードA)

○通巻60号(未収集による欠号)

○通巻61号(昭和36年4月):「6才ではおそすぎる?」(コードE)

○通巻62号(昭和36年5月):「先細りしていく“学力”」(コードA)

○通巻63号(昭和36年6月):「現代・勉強指南術」(コードA・F)

○通巻64号以下(未収集による欠号)

②「特集タイトル」メッセージの重点化

通巻1号から63号までの限定された「特集タイトル」にあっても、教育メッセージのさまざまな「特集タイトル」に込められ、発信されている。次のような教育の重点化を俯瞰することができる。²⁾

○基礎学力の充実(コードA)

○学習の系統性(コードB)

○生活規律と道徳教育(コードC)

○学校教育への理解(コードD)

○子どもの成長過程への関心・理解とかかわり(コードE)

○家庭教育の充実と親の情熱(コードF)

(5) 重点化メッセージの概要と背景

「基礎学力の充実」(コードA)は、各通巻において、その重点の置き方はさまざまであっても、不動の柱となっている。「読書」「勉強」「学科指導」「基礎学力」「学力」「進学」「テスト」「競争」などのキーワードが、「特集」に組み込まれている。これらは、子どもの教育においては、いずれの時代においても核となる普遍の課

題である。

団塊世代の児童数の歪なまでの多さの状況にあって、「学力」は児童がその後の人生において歩む必須条件であった。「学力」は、教育達成の指標とされた「学歴」に直結するものであった。学校の狭隘な施設の中で、「すし詰め」教室において、ひたすら「学力」を身につけることが、強迫観念のように求められた。「学力」のある児童の生産が、学校教育の成果としても受け止められた。

団塊世代児童の中学校期にあっては、「学力」は「テスト結果」(成績)として、「名前」「得点」が学校内に貼り出された。「各教科」「主要3教科」(英語・数学・国語)「主要5学教科」(英語・数学・国語・理科・社会)にわたって、成績上位者が何らの疑問もなく、公表された。³⁾

「学力を身につける」というよりも、「学力を確保する」ことへの拍車をかけた背景には、1961(昭和36)年から1964(昭和39)年までの4年間にわたって実施された、「全国学力テスト」がある。学校は、競争の場面となり、競争が教育推進の基本となっていた。⁴⁾

「学習の系統性」(コードB)は、「基礎学力の充実」と連動させて、組み込まれている。「基礎学力」は、「学習指導要領」(昭和33年告示)に基づく教科による学習内容との対応が基本となっている。⁵⁾

この「学習指導要領」は、これまでの「子どもの現実生活」や「子どもの経験」に重きを置く「児童中心主義的教育」を大きく変換することとなった。教科の学習の充実、学習の系統性によって、結果的には基礎学力の向上を図ることに重点が置かれることとなった。

生活規律と道徳教育(コードC)は、学校生活、家庭生活、社会生活を進めていく場合に、重要とされている教育の重点である。「しかる・ほ

める」「よい友達、悪い友達」「親孝行」「愛国心」「子どもの道徳・大人の道徳」「しつけと作法」「よい子の道徳意識」「これからの道徳教育」「子どものモラル」「道徳の時間」「子どもの性モラル」などをキーワードとした、学校・家庭・社会の生活に求められる多面からの視座が示されている。

「道徳」「道徳教育」「生活規律」などに重点が置かれる背景には、昭和33(1958)年の「学習指導要領」(告示)において、「道徳教育の徹底」を図るべく、「道徳」時間の特設(通称「特設道徳」)がある。子どものみならず大人の生活の在り方にも含みを持たせたものとして、雑誌「家庭教育」では受け止めた教育視座を組み込んでいる。

学校教育への理解と協力(コードD)は、教育の流れの大転換に伴う学校教育の推進に関して、保護者からの肯定的な理解と積極的な協力を得ることを求めるものである。「新入学児童・生徒に対する親としての心構え」「通知表の読み取りと理解」「PTA活動への参画」「宿題への関心」「学校教育動向の基礎的理解」「教科書・教育内容への関心と理解」「テストへの関心と理解」などのキーワードが散見される。学校教育に対して傍観者ではなく、親子ともに学校教育の流れにある存在として、意識化する意図を、これらのキーワードには、感じ取ることができる。

「学習指導要領」が、「試案」から「告示」になっていること、「学習指導要領」の基本方針や内容の軌道修正あるいは変換が行われていることなどが、「学校教育への理解と協力」を示すこととなったと考えられる。

子どもの成長過程への関心・理解とかかわり(コードE)は、保護者として、わが子をどのような面において理解するのか、どのように考えてかかわるのか、これらに重点を置くものであ

る。「わが子の遊び」「仲間関係」「友だち関係」「将来の夢やなりたい人」「性の意識や発達」「子どもの性格」「わが子への関心と目」「社会から見た子ども」「子どもへのかかわりのタイミング・適期」などに関するキーワードが把握される。「わが子に無関心」「学校任せ」であってはならないこと、こうした諸点を求めている。親あるいは保護者のわが子への関心を具体化したスタンスとして、わが子を「みる」「みきわめる」「かかわる」ことの滑らかな歯車のかみ合いが、基本の視座としてあると考えられる。

家庭教育の充実と親の情熱（コードF）は、「コードE」をせり上げたものである。「しかる・ほめる」「わが子の読書習慣」「わが子への配慮・心得」「わが子の勉強習慣」「親と子の思いの重ね合わせ」「家庭での教科指導とポイント」「夏休み等の長期休みの心得と対策」「新一年生への気遣いと配慮」「わが子の将来への思いの受け止め」「家庭でのしつけと作法」「家庭での作文指導」「宿題への関心と指導」「わが子の性格」「わが子の進学」「わが子へのまなざし」「家庭教育の充実」「親・保護者の評価」「わが子への勉強指南術」などのキーワードがある。わが子に向けた具体の姿勢が散見される。親・保護者も子ども、二人三脚でもって、ひたすら学校と協働しながら、家庭においても情熱をもってわが子の教育にあたるのが求められている。子どもの日常は、学校の教師と家庭の教師の二人と付き合うことが、基本として示されている。

（6）雑誌「家庭教育」特集事例のメッセージ

①基礎学力の充実（コードA）

「通巻20号」（昭和32年11月）において、「子どもの基礎学力」が特集として、編集されている。この号では、次のような三つの特集が組まれている。

○特集1 “勉強・勉強・また勉強”—子どもをむしばむ学力第一主義—

○特集2 『読み・書き』の力と本当の学力（座談会・子どもの基礎学力をめぐる）

○特集3 基礎学力をつけるには—家庭での勉強のさせ方—

この三つの特集では、親として子どもの学力をどう考えたらよいかを、課題として示している。「基礎学力とは」を読者層の親に問いかけながら、基本的な視座を提供している。次のような論点課題が示されている。

○基礎学力の低下を克服する。

○「読み・書き・計算」のできること、成績は基本であるが、これのみが基礎学力ではない

○テスト漬けでは、育たない。

○「人間として正しく生きる力」を育てることを犠牲にしてはならない。

○人間教育の危機にある。

○親も加担していないか。親にも責任がある。

○本当の学力は、「問題解決」の力を基にした学力を身につけること。

○勉強とは何か。各教科（算数、理科、国語、社会科）の勉強をどのようにするか。

○覚えるのみのツメコミは学力にならぬ。

○考えさせる教育が重要である。

○必要な知識は、やはり身につけさせなければならない。

○焦らず、ゆったりと構えた、生活や経験をふまえた教育や学習を進める。

○学校と家庭とは協力していく。

基礎学力をめぐるジレンマ的な論点が滲み出ている。「基礎学力」低下の現実を憂い、「基礎学力」を身につけること、向上させることの「理想と現実」のさまざまを「特集」の論説に把握することができる。

②学習の系統性（コードB）

例えば、「通巻18号」（昭和32年9月）において、「子どもの科学性の芽をのばすには」として、理数系の教育と学習における体系性や系統性が、間接的にも主張されている。次のような二つの特集が組まれている。

○特集1 科学技術教育のあり方—家庭教育における問題点—

○特集2 原子力・オートメーション時代の教育<科学者・技術者への道>

その1 求められている科学技術者

—科学教育の背景—

その2 子どもの質問に困る親たち

—科学教育の現状—

その3 生活の中で生かす科学的精神

—家庭での科学教育の方法—

この特集では、科学技術教育の必要性を前提にした、子どもたちに迫る科学技術教育のあり方の視座を提供している。次のような論点課題が示されている。

○ある水準以上の科学や技術に関する能力を持つ必要がある。

○人間の運命をになうものは、その知力である。

○その知力をとくに自然法則の発見とその利用に向けたものが、科学や技術である。

○知力だけでは、科学は発達しない。

○知力は、合理的なものに対する情熱の強さにある。

○科学や技術には、体系性や系統性があり、知力によって、それらが解き明かされていく。

○家庭の生活や教育にも、科学的教育の目標がある。

○自然界には法則性が、人間界には道理性があり、これらが練りあわされていくことによって、知力が身についていく。

○これからは、文系偏重ではなく、理科系中心

で、新しい次代を担う人材「生産人」をつくりだしていく。

○そのためには、小学校からの6・3制に基づく、体系的な科学教育を行う。

○狭い科学性に閉じ込めてしまうのではなく、「合理的精神の目」をもった、人類の生活を豊かにし、幸福にするための科学教育こそ真の科学教育である。

○学校教育の取り組みの現状では、科学教育には多くの課題がある。（しっかりした知識／教師の能力／受験勉強の偏重／不十分な教育環境）

○家庭教育にも多くの課題がある。（科学理解についての無理解／家の中の非合理性や親の頭の古さ／子どもの質問の育みを歪めている宿題攻め）

○学校で子どもが何を学んでいるのかを知るために、時々、教科書を読む。

○子どもの質問を意味のないものとして決めつけない。

○よい科学読み物（「まじめな科学読み物」）を子どもに読ませる。

自然科学に重点を置く特集である。情緒的な論理ではなく、体系的・系統的な教育・学習を基本にした視座が示されている。キーワードである「合理的精神」に基づく教育・学習にあつては、法則性を潜在させている自然環境にふれること、教師の能力・力量、家庭教育の変換などが、強調されている。

この「通巻18号」では、科学に関する「特集」のほかに、「学科の手引き」として、「国語科」のシリーズを掲載している。保護者向けの内容としているものの、学校の授業にも匹敵する指導の要点を国語教育の立場から提示している。次のような手引きの要領が把握できる。

○読む力をつけるために

○「分節と要約」の指導のしかた

○「説明文」の場合

○「物語文」の場合

○「脚本」の場合

この「通巻18号」における事例に示されているように、雑誌「家庭教育」では、いずれの「通巻号」においても、基礎的な学力、体系的・系統的な教育・学習を潜在させている。

③生活規律と道徳教育（コードC）

「通巻22号」（昭和33年1月）「通巻23号」（昭和33年2月）「通巻26号」（昭和33年5月）において、「道徳教育」をキーワードとした特集が組まれている。他の「通巻号」の特集項目ではみられないことからすれば、「生活規律と道徳教育」には格別の重点が置かれていると受け止めることができる。

「通巻22号」では、「これからの道徳教育」と題して、三つの特集が組まれている。

○特集1 この芽を伸ばそう「新しい子ども・新しい道徳」

○特集2 学校での道徳教育「おしつけでなしに生活の中でわからせる」

○特集3 先生から「道徳教育について家庭にのぞむこと」

「通巻23号」では、「子どもの道徳・おとなの道徳」と題して、二つの特集が組まれている。

○特集1 「子どもからみたおとな」（小学生座談会）

○特集2 「近ごろのおとなは一古めかしいおとなの道徳」（中学生座談会）

「通巻26号」では、「よい子にしたいならば」と題して、四つの特集が組まれている。

○特集1 品行方正・学術優等—親の考えるよい子

○特集2 お仕着せの道徳—子どもの道徳の芽を枯らせるもの—

○特集3 子どもたちの悩みと苦しみ—そこか

ら道徳意識は伸びていく—

○特集4 よい子にするために

「特集」はいずれも「学習指導要領」（昭和33年・告示）をふまえる論調として、道徳教育の視座を提示している。「学習指導要領の基準強化」「基礎学力の充実」「系統性の重視」「特設道徳」を特色とした「学習指導要領」となっており、大きく教育のパラダイム変換を行い、それぞれが重なり合った文脈に「道徳教育」を位置づけている。

④学校教育への理解（コードD）

「通巻32号」（昭和33年11月）「通巻53号」（昭和35年8月）において、「変わる学校教育」をキーワードとした特集が組まれている。

「通巻32号」では、「これからの学校教育はどう変わるか」と題して、次のような特集が組み込まれている。

○特集1 学習指導要領の改訂「どこがどう変わるか」

○特集2 座談会「昔にかえるのでは困る—新学習指導要領とその問題点—」

「通巻53号」では、「教科書をどのように考えるか」を取り上げて、特集を組んでいる。

○特集1 「を」「で」「でも」の教科書談義—「聖書」から「一つの参考書」へ

○特集2 「しか」と「さえ」の現実—教科書をめぐる二街道—

○特集3 教科書は父母の問題でも—親の手でやれること—

いずれの「通巻号」においても、学校教育への理解に関して、直接的な示し方になっている。保護者向けの雑誌であるにもかかわらず、学校教育の現実的課題の具体を果敢に保護者に示すものとなっている。この上で、「家庭教育」としての学校教育との関連から、保護者に教育・学

習の視座を提供している。「おかあさんは教育者」「自分で栄養がとれる子に一人間形成につながる作文指導」「おかあさんの心得」「家庭での勉強のさせ方（漢字の勉強・1年生のよみもの）」「勉強できるふんいき」「考えるクセをつけるには」などの見出しを「特集」と関連させて組み込んでいる。学校教育と家庭教育との一体的なメッセージを伝えようとしていることが把握できる。

⑤子どもの成長過程への関心・理解とかかわり (コード E)

「通巻 27 号」(昭和 33 年 6 月)においては、「特集」と銘打つての見出しを示してはいないもの、表紙には次のような二つの大見出しが示されている。これらを、「特集」として受け止めることができる。

○特集 1 性発達の心理「男の子と女の子」

○特集 2 学科の手引き「家庭では作文をどう導くか」

いずれも家庭におけるわが子の教育・学習への関心と理解を求めたものである。「性発達」については、子ども期の発達理解、男女の偏見、互いへの興味などについて、エピソード的に綴られている。「学科の手引き」では、「作文の勉強」が特集として取り上げられている。このほか、「社会科・理科」の「学習参考書」についても紹介されている。わが子とともに歩みながら成長し合うことを潜在的なメッセージとして把握できる。

⑥家庭教育の充実と親の情熱 (コード F)

「通巻 55 号」(昭和 35 年 10 月)をはじめ、各号において、一貫してこの課題は組み込まれている。雑誌「家庭教育」の真髓が、この「通巻 55 号」に、象徴化されている。「特集」と銘打つ

てはいないものの、「家庭教育真髓」が表紙を飾る大見出しとして示されている。

この「通巻号」では、「家族の関係の克服」「親子の関係」「親のあり方」「父・母・教師の慈愛と教育愛に基づく教育の要諦」などをキーワードとした論説が組まれている。このほか、この「通巻号」では、「志望校の選び方」「教科の教育・学習」「新しい勉強観に基づいた宿題論」なども、保護者に向けた基本的な考え方」や取り組みのスタンスが提示されている。家庭における教育の充実、家庭教育にかける親の情熱が、わが子の育ちにつながることで、親こそがわが子の成長のキーパーソンになること、こうしたことがメッセージとして組み込まれている。

(7) 雑誌「家庭教育」と「学習指導要領」

昭和 33 年告示「学習指導要領」は、昭和 22 年試案「学習指導要領」および昭和 26 年試案「学習指導要領」を受けて、示されたものである。雑誌「家庭教育」は、昭和 33 年告示の「学習指導要領」に照準を置いて、「特集」をはじめ論説の数々が編集されている。この点は、時期的にも符合する。昭和 33 年の改訂「学習指導要領」について、保護者向けの解説なり論説が組まれていることから、この点は明らかである。

「学習指導要領」は、昭和 22 年および昭和 26 年に、公表されている。いずれも「試案」としてであった。昭和 33 年の「学習指導要領」は、はじめて告示として公表された。わが国戦後の教育課程における法的拘束力を有する「学習指導要領」として、その影響力は、きわめて大なるものとして受け止められた。学校教育および家庭教育に有形無形の影響力で持って反映されることになった。雑誌「家庭教育」は、こうした背景の中にあつて、出版されることになったとも受け止めることができる。

昭和33年告示「学習指導要領」に至るまでには、試案としての「学習指導要領」が礎になっている。二つの試案「学習指導要領」の観点なり特色は、そのキーワードからは、次のようなものである。

○昭和22年試案「学習指導要領」：初の学習指導要領／教師のための手引書／平和教育／民主主義教育／児童・生徒中心の指導法／問題解決能力の重視／「社会科」「自由研究」「家庭科」（小学校）の設置／はいまわる経験活動主義

○昭和26年試案「学習指導要領」：昭和22年試案「学習指導要領」の修正／「自由研究」の廃止／小学校に「教科以外の活動」、中・高に「特別教育活動」を新設

昭和22年から昭和26年の短い間で、「学習指導要領」が試案として公表された。このことは、学校教育が迷走し、疾風怒濤の時期にあったことを裏返しとして示すものである。学校教師、家庭の保護者、そして教育行政の担当者であっても、揺れ動く同じ状況にあったと考えられる。

学校教育にまがりなりにもながしかの落ち着きをもたせたものが、昭和33年告示「学習指導要領」である。この「学習指導要領」は、大幅なる軌道修正を図った。次のようなキーワードから、その特色を把握することができる。

○道徳教育の徹底：「道徳」時間の特設

○基礎学力の充実：特に小学校の「国語」「算数」の充実

○科学技術教育の向上：「算数」「数学」「理科」の充実／中学校の「技術科」の新設

○中学校生徒の進路・特性に応ずる指導

○小学校・中学校教育の一貫性／基本的事項に重点を置く能率化

○義務教育水準の維持向上：教育課程の国家的基準の明示

家庭教育を補助的な歯車に見立て、学校教育

主導の力学による教育課程および実践の推進に拍車をかけるスタートとなった。わが子の「学力」の向上は、保護者の悲願である。このことにも裏打ちしながら学校教育に対する協力への姿勢が暗黙のうちに求められていった。子どもの取り巻きは、子どもの「学力」向上をめざした教師や保護者の大同団結した集団であったとの印象が強い。

昭和33年告示「学習指導要領」は、10年間にわたって学校教育の国是となり、教育成果の実績をふまえて、昭和43・44・45年告示「学習指導要領」へと練り上げられていく。次のようなキーワードから、その特色を把握することができる。

○小学校・中学校・高等学校の関連性・一貫性の重視

○時代の進展、児童・生徒の心身の発達と教育の系統性を考慮した基本的事項の精選と集約化：「教育の現代化」

○児童・生徒の個性・能力・特性に応じた指導

○各教科、道徳および特別活動の相互の緊密な関係を図る

雑誌「家庭教育」は、昭和33年告示「学習指導要領」に主軸を置く編集になっている。この方針にとどまらず、昭和43・44・45年告示「学習指導要領」を先取りしながら、教育の視座なり論点を先鋭化させて、編集を行っている。このことが可能となったことには、いずれの「通巻号」にも、広島大学教官をはじめ、岡山大学、教育委員会指導主事、学校の現職教員、そして団塊世代に児童・生徒をかかえる保護者の雑誌「家庭教育」への積極的な参画も、確かな背景になっていると考えられる。⁶⁾

(8) 雑誌「家庭教育」と社会環境情勢

団塊世代の学校期には、戦後にあつての激動

の状況があった。社会環境情勢が大きく変化し、その影響による学校教育の変化の波をかぶることになった。その時期を象徴するトピックスを示すと次のようなものが即座に思い出される。

○昭和 30 (1955) 年：ペンシルロケット水平発射公開実験／ラジオ東京 (TBS) テレビ局開局／第一回日本母親大会開催

○昭和 31 (1956) 年：佐久間ダム完成／科学技術庁発足／南極観測船宗谷丸出港／東海道本線全線電化／三種の神器（電気掃除機・電気洗濯機・電気冷蔵庫）

○昭和 32 (1957) 年：南極昭和基地開設／国産ロケット第 1 号発射成功／ソ連世界初の人工衛星「スプートニク」の打ち上げ成功

○昭和 33 (1958) 年：国立競技場完成／アジア大会東京開催／一万円札発行／チキンラーメン発売／東京タワーの完工式／NHK、日本テレビがカラーテレビ実験放送開始

○昭和 34 (1959) 年：NHK 教育テレビ、日本教育テレビ、フジテレビの開局／テレビ視聴時間中学生 20%が一日 5 時間（文部省調査）／日本テレビがカラーでナイター野球中継

○昭和 35 (1960) 年：「新日本安全保障条約」調印／インスタントコーヒー発売／チリ地震による太平洋岸津波来襲／NHK 受信契約数五百万件／国民所得倍増計画正式決定

○昭和 36 (1961) 年：ソ連人工衛星地球一周有人飛行／ベルリンの壁構築

○昭和 37 (1962) 年：東京世界初 1000 万人都市／国立がんセンター設立／ヨット太平洋単独横断成功／戦後初国産飛行機 YS11 試験飛行成功

○昭和 38 (1963) 年：大阪駅前日本初の横断歩道橋の完成／黒四ダム完成／日米間宇宙中継受信成功（ケネディ暗殺）

○昭和 39 (1964) 年：日本が OECD に加盟／富士山頂気象レーダー完成／東海道新幹線開通／

東京オリンピック開催／家庭用ビデオテープレコーダー発売

○昭和 40 (1965) 年：ソ連宇宙飛行士宇宙遊泳成功／家永教科書裁判／初の「コンピューター白書」

団塊世代の子どもは、このような激動の社会変化の中で、小学校児童や中学校生徒として、学校教育を受けてきた。このような社会変化は、学校教育や家庭教育とは、無縁ではない。雑誌「家庭教育」は、現実を敏感に受け止め、その後も続くことになるのであろう社会変化の勢いの中を歩む児童・生徒に、保護者に、そして学校教師に、具体的な方向性を示している。少々ではへこたれない子どもたちのこれからの歩みへのメッセージなりエールを送る装置であったとも受け止められる。

5. おわりに

本稿では、「団塊世代」の児童期を中心に、雑誌「家庭教育」の組み込まれている特集の論説を中心に、彼らが受けた教育の主流を素描した。筆者である田中自身が昭和 22 年生まれの「団塊世代」であり、本稿は、自身の学校教育ヒストリー的な取りまとめになっているところがあることは否めない。

「団塊世代」は、生涯にわたってライフステージの狭間にある。上世代からは煙たがられ、下世代からは批判的な眼差し、謗りを受けたりする。上からも下からも、さりげなく圧力が伝わってくる。そのためなのか、他世代の人たちとの交わりには用心深いところがある。同世代の出会いに対しても、用心深い。これが、「団塊世代」のキャラクターなのであろうか。⁷⁾

それぞれの世代には、固有な社会状況があり、学校文化があることは言うまでもない。例えば、「ゆとり世代」にあっては、その世代の学校期に

における「基礎学力」が焦点化されることもある。それぞれの世代の人たちは、自分の世代をどのように受け止めているのであろうか。

本稿では、同世代間のシナジー論を緩やかに潜在させながら、雑誌「家庭教育」にあるキーワードを手がかりに、世代論を試みてきた。世代論は、思わず知らず情緒的・感覚的な印象を持ち込むこともある。

幼児期の教育・保育の重要性が解き明かされ、強調され、公的にも示されている。「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」とする受け止めは、「教育基本法」「学校教育法」において、明示されているところである。こうした観点からも、「幼児期の生活」「幼児期の環境」「幼児期の教育・保育」「幼児期における人たちとの出会い」は、良くも悪くも、未来を歩む子どもの行く末に大なり小なりのつながりはありそうである。こうした、視座を、本稿では研究の下地としながらの「団塊世代」に限定した論究であった。今後とも、「幼児期」が、どのようなシナジーとしての装置になるのかについて、追究することとした。

注

- 1) 田中亨胤「団塊世代の児童が受けた家庭教育論（Ⅰ）—雑誌『家庭教育』の特集を通覧して—」近大姫路大学人文学・人権教育研究所『翰苑』（168-180頁）、

vol.3、2015

- 2) なお、これらの重点化のコードを、各通巻号にプロットすると、本稿の、「(4) ①「特集タイトル」の変遷」に示す通りである。
- 3) 団塊世代児童の、中学校や小学校同窓会では、「成績の貼り出し」は話題となっている。「できる子」「できない子」などのレイベリングが、懐かしく語られている。
- 4) この時期の「全国学力テスト」をめぐるのは、愛媛県や北海道をはじめとして、全国各地で「学テ」裁判が行われている。「全国学力テスト」は、社会状況の変化、PISAの結果などを受けて、その在り方に課題を含みつつ、断続的に実施されている。
- 5) 「学習指導要領」（昭和33年告示）は、告示により、法的拘束力を有するとの示し方になった。「系統性」を強調する教育課程の基準が示された。
- 6) 広島大学教官、岡山大学教官の積極的な雑誌「家庭教育」への協力・参画が見られる。座談会記録、論説、エッセイ、保護者への回答など、編集企画内容にその名を連ねている。例えば、次のような論客者である。いずれの方も、教育愛を持って、教育研究や実践などの教育界をリードした人たちである。
参画者：末吉悌次・新堀道也・佐藤正夫・石堂豊・吉本均・山本多喜司・古浦一郎・荘司雅子・名和弘彦・田代高英・酒井行雄・高木貫一・阿部余四男・杉谷雅文・吉岡一郎・今堀誠二・松永信一・村上忠敬・川地理策・池田勝人・岸本幸次郎・三好稔ほか多数（広島大学関係者）／広島大学関係者以外からの参画者も多数：羽仁説子・周郷博・滑川道夫・小川太郎・秋山和夫ほか
- 7) このような感じ取りは、次の貴重な回顧録において、確かめることができた。ペンネームの田月隆治氏（田中の出身高等学校の同期）には、感謝する。資料：田月隆治『回生』近代文藝社、2012年